

川崎市市民ミュージアム資料等収集懇談会（美術・文芸部門）会議録（摘録）

1 日 時 令和8年2月20日（金）10時から

2 場 所 川崎市役所本庁舎高層棟3階306会議室

3 出席者

（1）委 員 篠原委員、吉川委員

（2）事務局 川崎市市民ミュージアム 古泉担当課長、山崎担当係長、前崎職員

4 次 第 1 開会

2 懇談会概要説明

3 今回収集を予定している資料について

4 意見交換（資料収集方針との適合性や芸術性などについて）

5 閉会

5 公開・非公開の別 公開

6 傍聴者 0名

（次第一） 開会

（会議進行等説明）

（次第二） 懇談会概要説明、委員紹介

（資料1、2-1、2-2について説明、委員の紹介）

（次第三） 今回収集を予定している資料について

（資料3について説明）

(次第一 4) 意見交換 (資料収集方針との適合性や芸術性などについて)

篠原委員

大前提として、今回の作品は非常に素晴らしいものなので、積極的に購入を検討すべき作品であると考えています。

理由は3つ考えられます。まず、山口氏が川崎市で生まれ育ち、川崎をはじめとした都市の風景を多く描く画家であること、2つ目は令和6年に川崎市市民ミュージアムで開催した同氏の展覧会「River / Blue」の展示作品であること、3つ目は川崎を象徴する場所のひとつである沿岸部の工場地帯が描かれており、現代の都市の姿を象徴的に示したこれまでに無い視点で川崎の姿を表現した作品であることです。このような観点から、川崎市ゆかりの作家のコレクションの充実を図るに相応しい作品であると考えます。

作品が収蔵された場合の活用などをめぐる期待値については2つあり、まず、事務局の資料にもある通り、川崎のストリートカルチャーと関連づけた活用が考えられること、2つ目は川崎の歴史に関連する展示など多様な活用方法が考えられます。

続いて、資料収集方針に関しては、重点化項目1~4のうち、「(1) 産業史を含め、変貌する川崎の近現代史をものがたる資料」、「(3) 日本・世界で評価される川崎ゆかりの芸術家等に関する資料」に該当すると考えます。

「令和4年度 川崎市市民ミュージアム資料収集の取扱い」に関しては、「川崎ゆかりの美術作家の作品や、川崎と関りが深い人物のコレクションなどで、今後、展覧会の企画が可能な作品またはアーカイブズ資料を収集する。」とあり、収蔵庫がない現状において、あえて作品を収集する意義、意味は非常に大きいと考えていますが、当該作品が収蔵された場合は、今後の展覧会の企画などにもしっかりとつなげてほしいと願っています。

最後に、収集対象作品の芸術性にみる潜在的価値について触れたいと思います。私が調査・研究している鍋木清方の作品が2019年、東京国立近代美術館（独立行政法人国立美術館）により5億4000万円で購入され、美人画という側面だけでなく、暮らし、生活、風俗風習、風物など、人びとの文化の記憶、記録としての側面が非常に高く評価されています。これは言い換えると、美術史的価値に加え、文化史的価値が高いということですが、山口氏の作品については現代都市の姿を象徴的に表現しており、文明史的な価値が高い作品であると考えています。

文明 (Civilization) の語源が市民 (civis) や都市 (civitas) に由来することから、川崎市市民ミュージアムが収集するのに相応しい作品と言えると考えます。文明史的価値は聞きなれない言葉かもしれませんが、川崎市市民ミュージアムの特徴を考えると、「川崎」という地域性のみならずグローバルな視点をも含みうる文明史的価値という評価軸は重要で、今後の博物館活動の展開のあり方にも大きく関わってくると思われれます。そう考えると、「川崎」という地域性のみならず「文明」というパースペクティブで世界を共視する場をも切り拓く山口氏の作品は、積極的に収集すべき作品と考えます。

事務局

ありがとうございました。では吉川委員はいかがでしょう。

吉川委員

山口氏の作品については、ぜひ収集してほしいと考えておりますし、篠原委員がお示された資料収集方針と作品の関係性については、その通りと考えております。

篠原委員に付け足す形で作品の価値について述べたいと思います。西洋美術の学芸員の視点から山口氏の作品の制作手法について触れますと、展覧会の図録にモランディや赤瀬川原平の名前も出ていましたが、街をテーマにしている赤瀬川原平さんや、内省的なモランディの視点に加え、ゲルハルト・リヒターの絵画と写真を融合した作品にもインスパイアされているのではと感じました。写真は川崎市市民ミュージアムの収集の柱となっており、先日も「写真のなかのかわさき」という展覧会を市役所で開催されており私も拝見しましたが、市民が捉えた川崎というものを連綿とつないでいくような作品にこの作品も位置付けられるのではないかと思います。リヒターは、写真はレンズで捉えた錯覚的な風景に過ぎず、絵画こそがリアルであると言っており、それは、絵画は画家の身体性が記録される点で実在的な存在価値があるためリアルであると話しており、山口氏の作品も、スケートボードに乗った時の自分の感覚が記録されているという意味合いにおいては、リヒター的な写真と絵画の融合という文脈でも捉えることができると思います。市民ミュージアムは美術部門において写真と絵画両方を収集しているので、両方のコレクションを補強する作品と位置付けることができると思います。

また、題材について、「工場」は国内外から写真を撮りに来る人がいると聞いており、川崎を象徴する風景をモニユメンタルな大きさで作品として落とし込んでいるという点で、市民ミュージアムが山口氏の作品を収集する際に、とてもふさわしい作品だと思います。

事務局

ありがとうございます。両委員からご意見をいただいたところですが、そのほかにご意見等ございますでしょうか。

篠原委員

吉川委員のお話を聞いて、ぶれているような筆致は山口氏がスケートボードに乗っているときの身体感覚につながっているという捉え方や、リヒター、写真のコレクションとの関係性について気づかされ、改めて奥深い作品、写真との関連性が見えてくる魅力的な作品だと思いました。

吉川委員

写真との関係性という捉え方をすると、活用の幅も広がると思いますし、今後の市民ミュージアムの活動のあり方を象徴づける作品ではないかと思いますので、ぜひ収集していただきたいと思います。

事務局

本件については、両委員の御意見も鑑み、当館としては収集する方向で検討を進めさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

(次第一五) 閉会